



【インタビュー】

東区安心・安全で快適なまちづくり大使

東区長が

山本昌さんに聞く
まちのために、
私たちができること

山本昌さんは野球選手引退後、野球解説はもちろん、スポーツコメンテーター、講演会などでご活躍です。今回は、山本昌さんの仕事場ともいえる「バンテリンドーム ナゴヤ」のご協力により、放送室にて、近藤善紀東区長が、現役時代の経験やセカンドキャリア（引退後の活動）などをお伺いするなかで、まちづくりに取り組むためのヒントをいただきます。

(取材日 2021年10月29日)

山本昌さん プロフィール

「球界のレジェンド」の異名を持ち、現役32年間を中日ドラゴンズ一筋で活躍した名投手。1984年にドラフト5位で入団。3度の最多勝、1994年には沢村賞を受賞。2006年に41歳でノーヒットノーラン達成、2008年に42歳で通算200勝を達成するなど数々の歴代最年長記録を樹立した。2015年に史上初の50歳での登板を最後に、惜しまれつつも現役を引退。引退後は野球解説者・スポーツコメンテーターとして活動するかわら、趣味のラジコンや競馬、昆虫採集など様々な分野の特技と持ち前の明るいキャラクターを活かし活躍中。

——ドラゴンズ一筋の現役生活で、ベテラン選手になってからは、選手たちをまとめる役割を担っていたと思いますが、そのときに心掛けていたことは？

40歳を過ぎてから、かなり年下の選手と関わることになりましたが、大切にしてきたのは「会話をすること」でした。データや資料が簡単に手に入るようになり、最近の若い選手は技術的に伸びている印象があります。上からものを言うのではなく、若い選手たちもよく知っているという前提で話しました。ただ、今の若い世代は、練習や考え方がとても効率的。だから、「一見、無駄に思えることもした方がいいよ」とも伝えました。例えば練習方法について、「それはいらんんじゃないか」と思わないことが大事だと。先輩たちが作ってきた、ドラゴンズの伝統ある練習を否定してはいけないと。それを伝えてきました。

また、小さいことを積み重ね、継続することも大切です。例えば体調管理ひとつとっても、体を冷やささないために、夏のエアコンはタイマー設定にするとか、ノースリーブを着ないとか。そのおかげで、29年間は皆勤賞でした。まちづくりにも通じることで、「それをやっても…」と一人一人が思うような小さいことも、みんなであれば少しずつ大きな力になっていくのではないのでしょうか。小さなことの積み重ねが、大きなことにつながるのではと感じます。

——大勢の人をまとめていくというのは難しいと思いますが、気をつけていたことは？

プロ野球は、優勝や日本一という目標があるので、必ず同じ方向を向くことが大事です。東区の取り組みであるスモールアクション(※)も、区民が同じ

方向を向くことによって、少しずつ効果が出てきて、何年か経ち、成果につながると思います。一番大事なのは、組織として同じ方向を向くということ。その点では、星野監督や落合監督は、方法は全く違うけど、うまくいったです。

——若い人の言葉に耳を傾け、同じ方向を向かせるというのが、上に立つ人の、集団のリーダーなんですね。

現役時代は、私と立浪さんとが若手をまとめていました。私がピッチャーたちを、立浪さんがバッターたちをという具合に、風紀委員みたいな感じだったと思います。若い選手たちも、自分たちの個性や得意分野を持っています。野球理論や練習には寛大ですが、身だしなみや礼儀については厳しかったですね。ドラゴンズは古くからのファンが多いので、皆さんに応援してもらえるように、そういう面については、普段から厳しく言っていました。

——引退後、解説や講演などでご活躍ですが、今のキャリアを選んだいきさつなどを教えてください。

プロに入った選手は皆、セカンドキャリアを迎えます。私も引退を迎え、野球界や球団に恩返ししたいという気持ちがありました。今も当然あります。引退したときは勉強したいという気持ちもあったので、まず解説者としてスタートしました。最初は、50歳まで現場でやってきて、今度は解説する側なんて、できるのか不安でした。引退後、すぐクライマックスシリーズなどの解説に呼んでいただき、そこで、こうやって話すんだなと勉強を始めました。講演活動も、最初のころはできないと言っていました。最初のころからか、やるようになりました。何事も踏み出すことが大事だと感じています。この仕事



のためにノートをつけ始めました。気がついたことや自分が話すことなどを書き留めます。今ではもう10冊くらいになりました。

——講演会は一人で何分か話さなければならぬですが、そこに入っていくことにためらいはなかったですか？

最初は緊張しました。幸いなことに最初の講演は30分間でした。そこから40分、60分と徐々に長くなっていきました。ノートに書くことによって流れを覚えることができるので、意外に話せるなと思うようになりました。

——現時点のキャリアの満足度は？

一つ一つの仕事を一生懸命やっていますが、コロナ禍で、ここ2年グラウンドに下りて取材ができていません。選手の生の声をファンに伝えたいですが、それができない。野球教室も中止が多くて。私は星野仙一さんから、野球界のすそ野を広げてほしいと言われていました。その意味では満足度は低いけれど、コロナが収束し、通常の生活になったら、野球のすそ野を広げたいことを、しっかりやっていきたいです。

——話題を変えて、名古屋のまちの印象はいかがですか。